

### <書評> 鄭敬珍著『交叉する文人世界：朝鮮通信使と蒹葭雅集図にみる東アジア近世』

染谷, 智幸 / SOMEYA, Tomoyuki

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

99

(終了ページ / End Page)

106

(発行年 / Year)

2021-02-26

〈書評〉

## 鄭敬珍著『交叉する文人世界—朝鮮通信使 と兼葭雅集図にみる東アジア近世』 (法政大学出版局、2020年2月、4400円)

染 谷 智 幸

日韓（日朝）の文学交流並びに比較文学研究を考える上において、朝鮮通信使と日本の学者・文人たちの交わした詩・文章類は第一級の資料である。そして、その通信使（江戸時代に入って十一回目の宝暦使行<sup>1)</sup>）と日本の文人たちとの間から生まれた『兼葭雅集図』はその結晶、精華とも言うべき存在である。しかし、この『兼葭雅集図』が永く発見されなかったこともあって、それは伝承の幻花となっていた。金文京氏の手によって、その海東の花が、歴史の表舞台に晴れやかな全貌を現してからまだ日が浅いが（『18世紀日本知識人、朝鮮を垣間見る』成均館大学校出版局、2013年）、鄭敬珍氏は果敢にこの精華の解説と成立の探查に挑まれた。18世紀の日朝の文人たちが精魂込めた漢文・漢詩・書画を解釈することは決して易しいことではない。まずは、その挑戦に心より拍手を送りたい。

本書評は、鄭氏の本書上梓を学界の慶事としつつ、さらにこの挑戦の意味・意義を、日ごろ日韓比較研究を試みる評者が見極めてみたいと考えたものである。なお、私は日韓比較文学を論じてはいるものの、朝鮮通信使について特段の見識を持つ者ではない。見落としや誤謬もあろうことを最初に断っておきたいが、それは将来、専門家による本格的な本書への書評・批評によって自ずと正されるはずと信じている。また、筆者は鄭氏の博士論文（本書はその博士論文を基にしている）審査に副査として関わった者であることも、予め明らかにしておきたい。

まず、それぞれの章についての所見を述べ、最後に全体について論評を加

えたい。

## 序章

文人とは何か。東アジア全体を俯瞰しながら、この問題を整理しつつ、本書全体のアブストラクトを目指したものである。しっかりとした骨格を持つ文章で、分かりやすく本書全体の趣旨と構成を理解することができる。これがあるために、その後の各章を安心して読むことができる。と同時に、本章単独の考察としても、中・朝・日の文人意識の違いが凡そ明らかになったと思う。特に、東アジアの文人の特徴を、中→日→朝の順で論じながら、最後に朝鮮のソンビ（士）の存在に焦点を当てるなど、朝鮮を主軸にしようという本書の姿勢がよく示されている。ただ、欲を言えば、従来の中・日の二元論的文人研究に朝鮮を加えることで、東アジアの文人について何が新しく明らかになったのか、特に従来の見落としを、もう少し明確に指摘しても良かったと思う。というのは、従来の日・中二元の文人研究が見落としとしてきたものは実に大きいからである。その見落としを埋めることで、どのような新たな東アジア文人像が立ち上がってくるのか、朝鮮の庶孽文人研究を軸に展開する本書の価値や意義はまさにそこにあると思われるからである。

## 第一章 「文人」の交叉——七六四年の朝鮮通信使行と兼葭堂会との交遊

本書は今も述べたように、朝鮮通信使として来日した朝鮮の庶孽文人（この言い方は鄭氏の命名である）を軸にすることで、朝鮮通信使行と東アジア文人像に新たな知見を加えようとするものである。早速にこの第一章から庶孽、もしくは庶孽文人とは何かが様々な角度から論じられる。

庶孽（庶子）とは一般的には正妻でない女性から生まれた子のことであるが（正妻の子は嫡子）、朝鮮時代ではこの嫡子と庶子の線引きは厳格に行われた。例えば、家中では父親や嫡子を父や兄とは呼べず、政治的にも高い官職につけず、かといって他の身分にもなれなかった。この感覚が日本ではなかなか掴みにくい。もちろん、日本にもこの庶子問題はあるが、官僚国家であり「名」「建

前」を重視した朝鮮とは違って、「実」を重視する武士が権力を握った江戸時代では、庶子を他家に養子として出す、分家する、あるいは他の身分に鞍替えをさせる等、様々な現実的方策がとられたからである。よって、不満を持った庶撃が反乱を企てるような事件は日本ではほとんど起こらなかった。朝鮮時代における庶撃問題は極めて深刻なものがあつたのである。そしてそうした庶撃の人たちの中で、特に優れた詩文の才能を持った文人たちが朝鮮通信使として来日していたのである。こうした背景を持った通信使であつたからこそ、大坂での日本側の文人たちとの深い交遊が可能であつたこと、さらには朝鮮通信使の精華である『兼菫雅集図』が生まれてきたと鄭氏は述べる。この具体的な有り様は第二章以下で述べられることになるが、まずは、こうした視点を据えたことに本書の新しさと手柄があることを強調しておきたい。

ただ、更に本章の結論を補充する意味で以下の二つの点への留意をお願いしたい。

一つは、朝鮮通信使と庶撃の関係については精緻に論じられているのだが、朝鮮が中国へ通信した燕行使についての調査・分析が不足している点である。燕行使は朝鮮通信使に比べて回数も人数も多いことから、その全貌を明らかにすることはなかなか難しいが、使行員における庶撃の割合などは分かるはずで、その調査が日本への朝鮮通信使の製述官・書記の多くが庶撃であつたこと、また庶撃の家系でそれが代々に引き継がれていたこと等の意味をさらに明らかにするからである。

もう一つは、庶撃が生まれてきた社会的背景についてである。特に注意すべきは、鄭氏も「庶撃は嫡子という正統性を重んじる社会背景と、限られた官職を取り巻く両班「家(ガ・ガ)」の「生計」問題が相まって生み出されたもの」(39頁)と述べている、その「生計」についてである。実は、この「生計」問題については、拙編『韓国の古典小説』(ペリかん社、2008年)の座談会でも問題になった点で(該書29頁)、朝鮮時代の両班たちを考える上で極めて重要なテーマである。この点について深く考察された形跡が本国たる韓国においても無いように見受けられる。鄭氏にもこの点への解析にぜひチャレンジしてもらいたいと考える。

## 第二章 「文人世界」の共有 — 『兼葭雅集図』の分析から

本章ではいよいよ『兼葭雅集図』について本格的な分析と批評が始まる。

まず『兼葭雅集図』所載の絵について、これを別号図（文人別称を用いた画）と見て分析に入っているが、これは的を射た判断だと思われる。さらに、該当図が桃や松を中心に描かれている点等を捉えて、中国明代蘇州の別号図の作例（杜瓊『友松図』、林閩苑『桃李園図』、仇英『桃花源図』）等や、兼葭堂自身の『桃花図』を取り上げ比較しながら、『兼葭雅集図』絵が、理想と現実の間合いを上手く捉えた点、中国の神仙世界から離れて、目の前にある現実の中に桃源郷を見出した点に鄭氏は高い評価を与えた。これも見事である。特に、池大雅『武陵桃源図』や朝鮮の「真景山水画」を引き合いに出したところは、この絵の描画法が朝鮮通信使の背景とも深く絡む芸術的営為であったことを上手く引き出し、圧巻である。

なお、これは本書の出版上やむを得ないことだったのかも知れないが、この『兼葭雅集図』所載の絵をカラーの大写して本書の口絵にでも載せて欲しかった（白黒のものは図1として最初に掲載されている）。そうすれば、この絵の堂々たる松の緑や、堂の周囲に点在する何とも艶たる紅白桃、そして背後に広がる葭の群生と大海原の遠景が、鄭氏の説明をより印象深く読者に伝えただのではないかと思う。

続いて、詩の解析に入るが、鄭氏は細かな注釈的分析よりも、画文全体の構成を第一に捉えようとした。それは、表6（99頁）、図15（102頁）等を見れば明らかのように、全体的に上手く捉えられている。これはこれとして面白かったが、ただ、物足りなさというか不満は残った。やはり詩であるからには、全てでなくとも、詩文や韻律の味わいなどの分析は試みて欲しかった。たとえば構成に絡む問題として、全七篇の詩の最初と最後に朝鮮通信使への挨拶の言を含んでいる。成大中の序のすぐ後にある細合半斎の五言律詩と、大典の後序の前の片山北海の七言絶句である。細合の「回舟傳好事（回舟して好事を傳へよ）」、北海の「慇懃寫寄異方人（慇懃に寫して異方の人に寄す）」がその具体的詩句である。この二篇の間にある五篇は、通信使には触れずに、兼葭堂を取りまく浦辺の風情や、そこからの遠景、蔵書の数々、そして交わさ

れる酒という隠逸の世界が描かれる。特に四つめの詩、葉樹の「高堂常會友（高堂常に友を會す）」が象徴するように、現実の兼葭堂にはない高所の描写や、そこからの海への展望など、虚実を織り交ぜた詩篇の配置、構成が何とも心憎い出来栄である。そうした点について、鄭氏なりの「読み」をぜひ披露して欲しかった<sup>2)</sup>。

### 第三章 「文人」形成と「知」の体得

第二章の『兼葭雅集図』の詩画分析に続いて、こうした優れた詩を作った成大中や木村兼葭堂たちが、どのような環境や教育・自己陶冶に基づいて自由闊達な文人と成り得たのかに焦点が当てられる。その論述の過程で、鄭氏は成大中の家門と家門意識に言及する。言うまでもなく、成大中の家門は庶撃家となる前と後では大きな変化があった。政治的な待遇としては天地の差がそこで生じたのだが、その庶撃家では、家の優れた先人を讃える家学や、地元の科挙合格者を増やすべく教授活動が活発化した。そしてその過程の中から、代々日本への通信使を引き受ける役割にも繋がっていったという。すなわち、庶撃家としての成氏一族は、高位高官に昇ることは出来ずとも、自家や地元の人々のために力を尽くしたのである。今風に言えば、中央政界に登らずとも、地域の名士として自己の研鑽・鍛錬に努め、地域起こしに全霊を傾けていたということになる。また庶撃家としての成氏は、書画収集活動も積極的に行うとともに、また琴を中心とする音楽活動も盛んであったという。

一方、兼葭堂を始めとする日本の京坂の文人たちは、儒学の塾で経書を学びながら、漢詩の詩作も体得していった。特筆すべきは、そこでは漢詩の詩作方法のみならず、文人としての立ち居振る舞いまでも学んでいた点にあると鄭氏は言う。また、朝鮮の成氏と同じように、書画収集や琴、笛、茶にも精通していたのが京坂の文人たちであり、そこには自由恬淡の世界が繰り広げられていた。

こうしてみれば、朝鮮通信使たちと京坂の文人たちの深い交流は、起こるべくして起こったと言って良いように思われる。鄭氏が、こうした両者の接近を様々な角度から掘り起こしたのは実に興味深い。特に、従来ほとんど明

らかにされてこなかった、朝鮮での庶撃家の在り方について、成大中を中心に掘り起こして跡付け、日本の文人たちとの近接を証明して見せたのは大きな功績だと言ってよいように思う。

#### 第四章 「文人」を体得する—結社から隠逸まで

第三章までで本書の基本的骨格は出来上がっている。本章ではそれに様々な肉付けがなされる。まず、朝鮮側だが、成大中家が主宰した文人詩社（特に青城詩社）を取り上げ、そうした詩社が地域の若者たちの科挙合格の下支えをしたのに加えて、白居易の九老会よろしく風流韻事を種々に行っていた点を改めて指摘する。日本側では兼葭堂会から混沌社への在り方、または変化を丁寧に追いながら、やはり朝鮮と同じように、詩作と同時に風流韻事を楽しむ交遊の場であったことを指摘する。そしてその中から、「日朝両文人に中国の詩人たちの生き方や交わり方に、自らを見立てようとする意志が強くあった」（175頁）として老荘思想や陶淵明・杜甫との関係を見出す。もちろん、老荘や陶淵明・杜甫等の中国詩人たちに自らの人生や詩文を重ね合わせようとした文学者は朝鮮や日本において、それこそ夥しく居るが、重要なのは朝鮮の庶撃文人たちが、自らの庶撃という立場に、隠逸に向かわざるをえなかった陶淵明や杜甫の心象を重ねている点である。またそれは日本の文人たちも同じであり、その表れ方を葛子琴の詩の中から抽出している。

特に私が注目するのは、朝鮮の庶撃文人たちが、自らに向けられた朝鮮社会の残酷な処遇とそこから湧き上がる怨嗟慟哭に対して、老荘思想で慰めるとともに、陶淵明や杜甫たちの生き方に自らを重ねることで、個別の境遇や処遇を超越した、文学世界の普遍性を確保しようとしていたことである。そして、その普遍性こそが、朝鮮からみて夷狄であり、かつ仇敵でもあった日本文人たちの中に、自由で恬淡とした文学の普遍性を見出して、深く共鳴する素地と力があったということなのである。

## 終章

終章は全体を俯瞰して、その重要な論点を整理し、最後にこうした日朝の視点をさらに中・朝・日という東アジアの視点にまで広げたいと研究の展望を述べて終わる。私も、本書を拝読して最後に自分なりのまとめをしつつ、本書の意義や問題点を改めて述べておきたい。

いささか個人的な話になるが、私が朝鮮（韓国）の古典に興味を持ちだしたのは、朝鮮時代の古典小説（古小説）、特に金萬重の『九雲夢』『謝氏南征記』といった作品に接してからであった。同時期の江戸時代の小説を研究していた私にとって、こうした朝鮮時代の小説世界が極めて新鮮に思えたからであった。その過程で、ハンゲル小説の嚆矢とかつて言われた『洪吉童傳』（今は『薛公瓚傳』が嚆矢と言われる）に接した時、その豪胆な主人公、洪吉童が庶撃であったことに特に興味を持った。朝鮮時代の名君と言われた世宗王や、現在では世界遺産になり、高麗八萬大藏經の版木を所蔵する海印寺も、この豪放磊落な主人公には散々な目にあわせられる。そして、この主人公の原動力となったのが、朝鮮の庶撃たちに対する処遇であり、それへの主人公の反発・怨恨であった。また、作者の許筠はそうした庶撃たちの境遇に同情したことから、反乱に加担したという咎で処刑されたりもした。朝鮮にとって庶撃とは一体何か、そうした疑問・関心が、朝鮮古典小説を読み続ける中でずっと消えずにあったのである。

今回、本書を拝読し、私なりに書評をまとめてみたいという気持ちになったのも、その点への興味が第一であった。結果、たいへん勉強になったことはもちろんだが、朝鮮の庶撃社会が一つの成熟された世界を創り上げていることを知り、いささか安堵にも似た気持ちになったことを正直に告白しておきたい。特に、成大中を中心にした庶撃文人たちが、自分の置かれた環境に挫けずに精進を続け、文学世界を探索しつつ、日本の文人との間に深い魂と文雅の交流を作り上げることに成功していたからである。

私は授業などで、いささか浅薄な言い方だとは思いつつ「日韓・日朝というのは、政治や歴史で傷つくも、文学が常に両国を癒し続けてきた、そんな関係にある」と言うのだが、今回本書を拝読して、あながち的外れな放言で

もないと思ひ返した次第である。

今回、鄭氏が取り上げた東アジアにおける、文人の問題、庶孽、庶孽文人の問題は、極めて重要な視点である。鄭氏も述べているように、この問題をさらに違う時代や地域、中国を含む東アジア全体の問題として広げていくことを切望するものである。

## 註

- 1) この十一回目の使行については様々な呼称が行われているが、一七六四年は六月に宝暦より明和に改元されている。六月は朝鮮通信使が帰国した後であり、その帰国を待って改元されたと考えられることから、ここでは宝暦使行と呼んでおく。
- 2) なお、この『兼葭雅集図』の読みについて、鄭氏は第四章で試みておられる。ただ、やはり物足りなさは残る。